

第三回「文芸思潮」短歌賞 発表

第三回「文芸思潮」短歌賞に御応募くださり、まことにありがとうございました。今回は四八名九六首とやや少なくなりましたが、日本の伝統に則った自然と人生とに和した叙情歌としての短歌は多く集まり、期待に大いに応えていただきました。厚く御礼申し上げます。

現代の短歌は荒廢のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌から離れて言葉や観念の遊びになっていきます。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始め短歌賞とて、応募作品の中に、今回も真の短歌精神が生き生きと漲っていることを感じ取ることができました。残念ながら第三回は最優秀賞は出ませんでした。この息吹のうちにまた優れた歌が寄せられることを次回に期待したいと思います。

集まった応募作の中から、まず予選担当によって第一次、第二次、第三次の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、四月十日、福田淑子、五十嵐勉の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

第四回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

〔「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮〕

優秀賞

石井和子 (和歌山県西牟婁郡)

風間洋平 (新潟県新潟市)

尾内甲太郎 (静岡県浜松市)

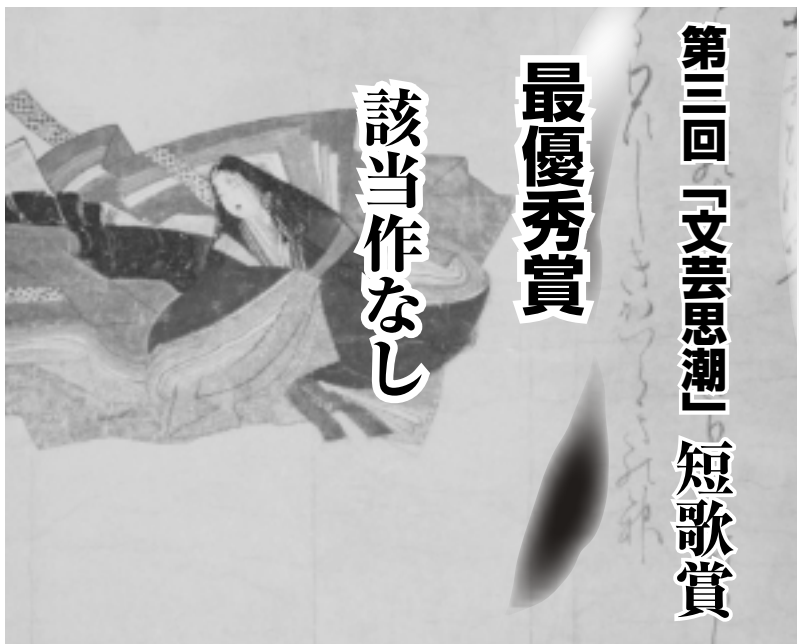
工藤瑞樹 (愛知県名古屋市中)

鈴木あぐり (栃木県小山市)

第三回「文芸思潮」短歌賞

最優秀賞

該当作なし



奨励賞

星野秀水 (福岡県太宰府市)

三ツ木健 (東京都墨田区)

田浦チサ子 (福岡県北九州市)

新井巳喜雄 (埼玉県児玉郡)

平尾三枝子 (岡山県岡山市)

葵井禎子 (京都府京都市)

渡良瀬愛子 (千葉県柏市)

原比呂子 (大分県国東市)

華央子 (北海道茅部郡)

野葛間 (長野県上田市)

徳永逸夫 (高知県須崎市)

志水麻衣子 (東京都港区)

渡邊美愛 (愛知県名古屋市中)

山本 明 (千葉県市川市)

佐藤優羽 (東京都府中市)

清水隆司 (千葉県松戸市)

選評

思いと叙景

五十嵐 勉

第三回の短歌賞は、残念ながら最優秀賞は出なかった。深い思いと叙景が密接に絡み合つて天に届くような昇華を見せている名歌、秀歌というものは、そう頻繁に出るものではないと思いつつ、どこかでそんな歌に巡り会うことを密かに期待している自分がある。ただ、もう一步でその賞賛を贈りたい歌もいくつかあったことは、事実であり、そのいい味わいもまた否定できない。

私としては、それに最も近かつた歌は石井和子氏の二首である。特に

「骨肉の離れ難かる煮凝りの白き魚あり刻が流るる」

はその造形の深さが奥行のある味を広げている点で、賞賛すべき一首と思つた。これはこれで、完結した重みを備えているので、表に出ていかないからこそ脹らむ人生の凝りの深さをしつかり受け取るべきだが、天へのはばたきとは逆の方向へ沈むベクトルが賛同を得られなかった。もう一首の

「よるべなき軽やかさも蝶亘る紀伊水道の五月たそがれ」

の言葉のような冬の陽」は比喩が悪い。短詩では、「ような」などという例えを用いる言葉の余裕はない。着想はいいので、それにどのようにリアリズムを付与して表現するか、表現を鍛えてほしい。

風間洋平氏の

「亡き母の着物解して作りたる暖簾掛けたりしはし触れみる」

は、亡き母親への愛情が暖簾の布の肌触りに蘇るようで、味わいの深い一首である。母への愛しさが匂い立ち、慈しみが深く流れている。「しぼし」がやや弱いかな。

最後の優秀賞鈴木あぐり氏の短歌も、同じ母親への追懐を表出していて、感深いものがある。

「袖口で滴る汗を拭いおり草引く母や麦雨に還らず」

この歌は読めば読むほど味わいが増し、生きていた頃の母堂の姿が彷彿とする秀歌である。袖で汗を拭うそこに働き輝く母親が息吹を放っている。永遠の中に溶け込む光がある。黄泉の母親と今生きている自分の命とを結ぶ、強い絆が彼岸と此岸を繋いで輝いている。

奨励賞の野葛間氏の二首も、母親を偲びつつその絆を確かめる歌で、

「亡き人の育てし薔薇も朽ち果てて匂ひ袋に蘇らせむ」

がナイーブな受容を表出する一方で、

「朧夜に少女密かに紅をさす母の鏡台映し出す翳」

も秀歌で、軽やかさとよるべなきを海の広さの上に描いて季節の華やかさの中に逆にはかないものを表出する歌意の深淵は、一流の表現に達している。ただ「亘る」がこれいいのか、疑問の余地があり、「渡る」か「わたる」も考えられるところだが、とにかくこれだけの歌の表出は誇つていい力量を示している。

同じく優秀賞の工藤瑞樹氏の

「垂乳根の指を吸い吸い稚児ねむる枯れそめし野に夢見し春ぞ」

も、その描かんとする世界の重層的な広大さは魅力があるが、「垂乳根の」が母にかかる枕詞である点、「枯れそめし野」の「そめ」が曖昧な点が、難とされて評価を落とした。その点では、やや小粒だが、

「遣る瀬なき法事の席の陽だまりに小さき姪の足寛ぎて」の方が無難で、流れもよく通つて、情景が鮮やかなので、こちらを優秀賞とした。三〇歳という若さの割に、古典的な歌相を身に着けているのは好感が持て、今後に期待する。

二首全体を「冬の別れ」と題した尾内甲太郎氏の「手のひらを逃れこぼるる風花のやがては風となり果つるかも」

は、切り取り方もよく、流れもいいが、惜しむらくは、「風」が重複している。「風」の代わりに何かないか、もつと探してもよかつたのではないかな。もう一首の方は「祖母

と、女性の一面の積極的な引継ぎをも覚悟する艶めきもあつて、相反する貌が双面の幅を出している。「飛花落葉」というタイトルにも合っていて、いい。

逆に父親を通してリアリズムで迫ってくる歌もインパクトがあつた。しみずたかし氏の「父抱き眠りし夜の悲しみは鼻腔を穿つ鱧へた老臭」は、一見顔を背けたくなる老いの無残さが被うが、その徹底した写真の中に、逆に父親の真の姿があり、そこに男の老残の姿を見て逆に愛惜を深くする流れは、胸に食い込んでくる。

志水麻衣子氏の歌は爽やかに広がる自然の吸引がある。「空色のペンキぬりたて寝転んで洗濯物のはためくを見る」は、一仕事終わった後の空と風がよく薫ってきて、気持ちがいい。空はどこにも描かれていないが、言わなくても「空色」を遣うことで、その広がりの中にあることが十分感じられ、洗濯物を翻す風の快さが青空と溶け合っている感覚がよく伝わってくる。

北海道の地で作歌する華央子氏は、エスプリの匂いをその風土に乗せた作風でシャープだが、その分流れがギクシャクして、やや硬く感じられるのが惜しまれる。「清らかな水面に足をすべらせて光を織りし白鳥の群れ」も、視点はいいが、「清らかな水面」や「光を織りし」は人工的な捉え方が勝っていて、潤いに欠ける。エスプリ

の切れ味を残すと同時に、生命や優しさへの汲み取りを深めると、さらにその素質が生きるだろう。

平尾美枝子氏の病院の友への二首は思いが溢れていて、いい。ただ、二首の構成ならなぜ無菌室にいたのか、どちらかで明らかにしてもらった方が、奥行きが増しただろう。「しろがねの月の光よ降りそそげ無菌病棟きみ臥す窓に」「無菌室からひととき解かれし友に添い秋のベンチにおむすび食べる」

どちらもいいが、一首目の方が重いので、詠嘆は深いものの、病が明らかにならない分、「しろがね」がやや浮いて滑るのが惜しまれる。また応募原稿に横書きで書いてくる無頓着さも減点となった。

「八月十五日」と題した三ツ木健氏の

「一兵の呐喊眠る南海にあおき空ありあおき島あり」

は、太平洋戦争を顧みる歌だが、戦没者を悼むその思いは痛切なものが確かに宿っている。しかし「呐喊」は地上戦で響くものなので、「南海」よりも「島」にかかるようにしてもらえば紛れがなく結晶度が増しただろう。「南海の」から始まる形もあつたかもしれない。

星野秀水氏の

「還らざる北の領土へ向かふ雲朽ちし祖父らの墓地巡るがに」も北方領土で無念に戦死した人々を追懐する歌で、悼みと北方領土への思いがしっかりと乗っている。「悠然と」

見事に空へ翔け昇っている。この「かなしみ」の相が、現実との結節を暗示しているとさらに結晶しただろう。

自然の中に吸い込まれていく思いの美しさは葵井禎子氏の「ドレミファの次のソのおと春風の中でわれの手すり抜けてゆく」

にもあり、「春風」と「手をすり抜けていく」という表現が絶妙の取り合わせをなして、流れていく。前半が単調で味気ないのを少し工夫すればさらによくなったかも。

田浦チサ子氏の

「人々の深き祈りを収めたる観音のみ手に優しさあふるる」は、仏像の真の慈愛をよく表現して、麗しい。祈りを受け止める心がないと、このような仏像の本質に迫る歌はできないだろう。

まだ若い佐藤優羽氏はスケールの大きさが感じられる。「大陸を端へ端へと押し寄せる白い波濤が芯まで揺らす」は、陸の涯で見る海の壮観がよく表出されていていいが、「芯まで揺らす」がやや小粒になってしまっているのが惜しまれた。

他にもいい歌はあり、少し直せばはるかによくなる歌もたくさんあつた。表現をさらに鍛えて、生きたことと生かされていることとの交わりを心の花に結晶させてほしい。次回も期待したい。

を「還らざる」に直したことでさらによくなった。

三回続けて入賞となった新井巳喜雄氏の歌は、故郷の生きた息が染み渡る世界が今回も開示されていて、一貫した美しい営みが過去へのいとおしみの中に感じられる作風は今度も結実している。

「父祖からの井戸の泉は湧き続く水神まつる祠とともに」「井戸水を天秤棒で運ぶ母幼きわれを背中に負ひて」

どちらもいい。

繋がるテーマでもある原比呂子氏の

「限界の集落焦がす曼珠沙華人等ふる里捨てて帰らず」

は、「焦がす」にやや苦しさがあるものの、寂しさや荒涼を、逆に詠嘆の強さに変えて直面する故郷の現実を浮き彫りにしている。

「役員のと責受けし社を後に丘より送る夜汽車の尾灯」

この山本明氏の歌は、サラリーマンならほとんどの人が味わう落胆悲哀の時を、一つの人生の歷程の中につかり見つめて、詠嘆として刻印している佳い歌である。この夜汽車の尾灯は、鉄路が自分の長い人生航路を追うように、どこまでも余韻を引きずっていくのが胸に深く残る。

渡良瀬愛子氏の

「碧なす火口湖たゆたふ白煙の消えゆく空よりかなしみは来る」は、調べがきれいに高まりを描くと同時に結句の転調が



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流論の島」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTTプリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勸
めで短歌誌「美知思波」入会

佳作

- 辻花ひろ
- 岩谷隆司
- 愛闘希
- 坂井 傑
- 谷町規
- 瀬戸内光
- 日野正美
- 松下二三夫
- 田和 明

入選

- 柀 二郎
- 械冬弱虫
- 岡崎佐紅



情感を捉える言葉を紡ぐ

福田淑子

コロナ禍はなかなか治まらず、ロシアのウクライナ侵襲などところ穏やかではない社会情勢がこれでもかと押し寄せる昨今である。かつて、「情念の方がよほど病氣よりたちが悪い」と言った思想家がいたが、世界いたるところで争いがあり、災害や病や格差に苦しみ、また、妬みや恨みの気持ちに理性を失い、狂気を生み出す。まさに人の持つ欲望や闘いの情念を抑えこむ魔法はないのかと思ってしまう。科学は日進月歩で進化し続けていて、とても小さな頭では追いつくどころではないが、様々な不安に翻弄される感情は、科学のように進化してゆくことはないのだろうか。そんな中で、私たちは歌を詠むという営みを通して、自然の豊かさに心を奪われ、己の心を反芻し、限りある命の一瞬をなんとか掴み取って言葉に託す。そして、詠まれた歌は読み手を得て、見えない他者との心の交流をするという世界を持っている。この豊穡の時を感謝したいと思う。歌を詠み続けることで、科学では見えないものが薄暮の向こうにしらじらと見えてくるのではないかと、期待してやまない。

今回は大賞に該当する歌がなかったとはいえ、いずれも

そんな心情を見事にとらえた一首。この景の中で、「なり果つるかも」と言い放つのではなく、もう少しいくつか別の語句を動かしてみるのも面白いのではと思うがいかがであろうか。

「遣る瀬無き法事の席の陽だまりに小さき姪の足寛ぎて」

工藤瑞樹

親しいものの死はやりきれないのだが、命は必ず尽きる。枯れ果てて死んだように見える冬の木々に新しい青い芽が吹いてくると、脈々と続く命の循環を思う。葬儀場で、死ぬとはどういうことかなどおぼつかない幼子が、足を投げ出してくつろいでいると、不謹慎にも心が緩んで微笑んでしまうこともあるだろう。「陽だまりに小さき姪の足寛ぎて」の情景描写が見事な一首である。

「袖口で滴る汗を拭いおり草引く母や麦雨に還らず」

鈴木あぐり

畑や庭で懸命に働く母の姿が眼に焼き付いているのだろう。麦雨とは五月雨の事だが、恐らく雨が強く降っている日は骨休みの暇もあったのだろうか。そんなほっとするひとときをもう一度迎えることなく逝ってしまった母親の、草取りの合間に袖口で汗を拭いている姿が健気で懐かしきとおしい。亡き人を思い出すとき、どの場面やどんな表

独自の心象や風景を詠み込んだ短歌の魅力を十分に備えた作品であった。

優秀賞から感想を述べてみたい。

「亡き母の着物を解し作りたる暖簾掛けたりしはし触れみる」

風間洋平

生前、愛用していた母の着物にはその人生の喜び哀しみ、生活の息遣いがしみ込んでいるだろう。それが、日々の生活を彩る暖簾に変身して生活の中に蘇る。暖簾となることで作者の思い出のなかの母が何よりも手触りで伝わってくる。ところで、一首の中に動詞が四つ使用されているが、「解し」か「作りたる」のどちらかは別の言葉に置き換えた方が動きのせわしなさが消えるのではないかと思う。

「手のひらを逃れこぼるる風花のやがては風となり果つるかも」

尾内甲太郎

冷たい空気とともに雪の結晶である風花が陽の光を反射してきらきらと流れてくる。誰しも受け止めたいと手を出すが、手のひらで一瞬できえてしまう。捕まえそこなった風花は木々や雪上に落ちてもとどまることなくふうつと消えてゆく。風花が風の花と呼ばれる所以である。花のように降り積むことはなく、風になって消えてゆくのである。美しいものは儂い。儂いものに人は心をそそられる。

情が浮かびあがってくるのか、それでその人の人柄やその人への思いが見えてくるようで、しみじみと懐かしさも伝わってくる。汗や麦雨などの語句がうまく響きあって、みずみずしい印象が残る抒情歌である。

「骨肉の離れ難かる煮凝りの白き魚あり刻が流るる」

石井和子

食卓の皿の上の煮魚だろうか。煮凝りが骨と肉を離れがたくしている。煮凝りの絡まっている白い身を骨から何とか剥がしたいのだが、時間がかかっている。そんな日常のもたつきの時間を「刻が流るる」と意識化することで、何気ない日々の時間を顕在化している。日常の時間を焙り出すことで、生きるじたばたが、いとおしく感じられてくる味わいのある一首である。

今回はたくさん作品が奨励賞となった。いずれも力作でそれぞれに魅力があったが、その中からいくつか取り上げてみたい。

「人々の深き祈りを収めたる観音のみ手にやさしさあふるる」

田浦チサ子

これまでに幾万の民衆が仏像や観音に祈りを捧げてきたことだろうか。いつの時代にも、人はそれぞれの苦悩を抱

え、目に見えない大きな力に救いを求め、それに運命を託してきた。人々の祈りを観音像は、手の中に抱え込んでいるのだろうか。祈りを受け止める観音像のみ手には限りなくやさしさがあふれているだろう。そんな思いを感受する作者の深い人生観を思いみる一首である。

「役員の叱責受けし社を後に丘より送る夜汽車の尾灯」

山本 明

勤め人には誰にでもそんな日があるだろう。 労。 覚えのある人には、身につまされる一首。

まるで、仲間から外れた「銀河鉄道」の主人公のジョバンニのように、丘から夜汽車を見つめて、遠ざかる夜汽車の尾灯に置き去りにされた切なさが伝わってくる。

「限界の集落焦がす曼殊沙華人ら、ふる里捨てて帰らず」

原比呂子

感慨の深さ思いの切実さが伝わってくる。人が住まなくなった集落の空虚が曼殊沙華の花の「集落焦がす」ような熱い色合いと「ふる里」の表記でいつそう身に迫る。作者にとつてはふる里が無人となってしまうことは、身を切られるような痛切な寂しさなのであろう。この集落があたかも幻想の世界のように浮かび上がってきて、印象深い。

感ずべてに伝わってくる。神居という地名も神のいるところで見守られている児らの姿が思い浮かんで、神々しさに包まれた子供の未来を感じさせて、手放して明るく気持ちのいい情景である。

「時を捨てて人を捨てたる成れの果てわが身のほかに捨つるものなし」

清水隆司

時も、人も捨てて、人は生きていけるのだろうか。世捨て人は昔から数限りなくいるが、時を捨てるとは、過去を忘れ未来を期待しないということか。これでは捨てるものは確かに我が身しかないだろう。身を落とすということか。そんな自分をこのように高らかに詠まれると、この方は大丈夫ではないかと、思ってしまう。そんなふうにならざるをめて突き放せるほどの、矜持の高さをも垣間見る一首。

応募されたお歌はそれぞれ、生き生きとした人生の実感に裏打ちされ、言葉もよく練られていて心打たれるものばかりであった。ひしひしと一人の人間の実存のしかかってくるような圧迫感さえ伝わってきて、充実した時間を共有させていたのだ。今日、様々な表現形式の中で、時に短歌という形式に物足りなさを感じることもあるのだが、やはり千年もの時間をくぐって脈々と紡いできた伝統と言葉は、私たちに力を与えてくれるものだと言信した。これからの、力を与えてくれる短歌を期待したい。

「ドレミファの次のソのおと春風の中でわれの手すり抜けてゆく」

葵井禎子

さりげない日々の暮らしの中で、一瞬の官能を刺激する美しい時間がある。 ころやかな春風をドレミファの音階に喩えて、触覚と聴覚をみごとにコラボさせて楽しい歌である。感覚が研ぎ澄まされている豊かな人生が垣間見える。

「竹添へてトマト三本育てをり芭蕉句碑たつ寺の畑に」

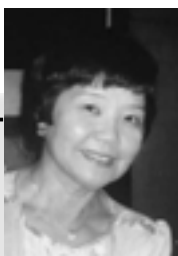
徳永 逸夫

高知県の須崎市の圓龍寺には確かに芭蕉の句碑があるようだ。「春もや、気色とこのふ月と梅」。歌に詠まれたのは、この寺の畑のことだろうか。三株のトマトを育てているのは住職か。トマトの蔓がまっすぐに伸びていくように竹を添えてあるのだろうか。そんな、なんでもないさりげないお寺の叙景なのだが、三本育てているというのがつましやかで、とほけているようで、なんとも味がある。歌の中に芭蕉の句碑を詠み込んだところが絶妙で、俳句的な味わいもあつて面白い。

「はつなつの水をざんぶと掛け合ひて児らは神居の川にあそべり」

渡邊美愛

一七歳の高校二年生の作品である。「ざんぶ」というオノマトペを得ることで子どもたちが水辺で遊ぶ躍動感が五



福田淑子

ふくだ よしこ

1950 東京都生まれ

2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入選

2007 「孤独なる球体」で第8回大西民子賞受賞

2018 歌集『ショパンの孤独』で第13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞

著作に『文学は教育を変えられるか』（文学教育評論集、2019）等。短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現代短歌〔舟の会〕、俳句同人誌「花林花」所属 俳句誌「架け橋」会員

鉄幹晶子全集刊行会元編集委員

NPO 日本詩歌句協会短歌部門選者



福田淑子歌集「ショパンの孤独」